



第 80 回岩手大学 COE フォーラム

岩手大学 21 世紀 COE プログラム「熱-生命システム関連学拠点創成」では、関連分野において国内外で活発に研究をされている方をお招きしてフォーラム（セミナー）を開催しています。今回は、農業環境技術研究所・藤井義晴先生をお招きし、植物のアレロパシー現象とそれに関わる物質の同定と利用についてお話をしていただきます。植物が主体的に行う周囲の生物との相互作用を司るアレロパシーは興味深い現象です。

お忙しいとは思いますが、多くの方々にご参加いただきますようご案内申し上げます。

第 80 回担当・（独）森林総合研究所・林木育種センター・東北育種場
大宮 泰徳 yohmiya@affrc.go.jp
(学内連絡先・上村 松生 uemura@iwate-u.ac.jp)

日時：2009 年 2 月 27 日（金）10:30～12:00
場所：岩手大学農学部 2 番教室

藤井 義晴 氏

独立行政法人農業環境技術研究所・生物多様性研究領域
外来生物生態影響リサーチプロジェクト・リーダー

アレロパシーによる生物間相互作用とその存在意義

Allelopathy as a tool of interaction between plants and other lives,
and significance of allelopathy

アレロパシー (allelopathy : 他感作用) は、ギリシャ語の allelo (お互いの) と pathos (影響を受ける) から造られた言葉で、「植物が環境中に放出する化学物質 (他感物質) によって、他の生物が、直接又は間接的に何らかの影響を受けること」を意味します。アレロパシーの特徴として、個体間の相互作用であることと、生存上必須ではない二次代謝物質を利用すること、その作用が特異的で、ある生物の生育に影響するが、他の生物には効果がない場合があることなどがあります。このような特性を利用して、アレロパシーの強い植物を用いた雑草防除や新たな生理活性物質の発見が期待されます。本セミナーでは、アレロパシーが示唆される現象、証明法、新規生理活性物質の同定について紹介します。そして、アレロパシーが植物の生存戦略上果たしている役割について考察したいと考えています。特に今年から始まった生研センターのプロジェクト研究や、ヒガンバナ、オオハナウド、ヘアリーベッチなど寒冷地に関連したアレロパシー植物、ネギの根から出る物質によるトマトの霜害防止現象など、寒冷地に関係した現象についても簡単に紹介したいと思います。